

## はじめに

豊かな生活を求めて経済中心の考え方が支配した20世紀、そのお陰で日本は世界でも類を見ないほど経済発展を遂げ、我々の生活も豊かになった。豊かさの象徴であるモータリゼーションの発達は行動範囲を飛躍的に広げ、蝶の調査も以前とは比較にならないほどスピードアップし、多くの研究成果がもたらされた。また、全国に多くの同好会が発足し、蝶の研究に関する文献が数多く発行されたのも豊かさならではの現象であり、心のゆとりができた結果であろう。

しかし、経済成長が及ぼした影響は予想外に大きい。大気汚染・地球温暖化・酸性雨などの環境問題、ダイオキシン・環境ホルモンなどの健康問題とあげれば枚挙にいとまがない。それは我々人類だけに関係することではなく、小動物の蝶類にとっては我々以上に大問題でもある。

レッドデータブックに名を連ねている蝶類が多くあるように、環境の変化によって多くの種が環境に適応できなくなり絶滅または絶滅危惧種として地球上から消えようとしている。しかし、これらの悪条件をもろともせず、地球温暖化などの条件をうまく捉え、分布を拡大している種もある。兵庫県においても急激な環境の変化によって生息地がなくなったり、個体数が少なくなっている種は極めて多いが、分布を拡大している種、新しく発見された種の数はい前より増えている。

白水(1958)によると、1958年までに兵庫県で確認されている種はセセリチョウ科16種、アゲハチョウ科12種、シロチョウ科9種、シジミチョウ科33種、テングチョウ科1種、マダラチョウ科2種、タテハチョウ科32種、ジャノメチョウ科15種の120種となっている。その中で土着種は109種、土着か偶産か判定が困難なもの6種、記録はあるが土着種ではなく、確実に、あるいはほとんど確実に偶産種と認められるものが5種となっている。

さらに7年後に発表された白水(1965)によると、土着種は113種、土着か偶産か判定が困難なものが6種、偶産と認められるものが8種の計127種となり、7年間で土着種が4種確認され、7種が発見されたことになる。

筆者らは兵庫県に何種類の蝶がどこに棲息しているのかということ明らかにするため、1975年頃より県下各地の調査を行うとともに、採集記録の集積を行ってきた。その結果は県下の同好会誌などに「兵庫県産蝶類分布資料」として18回に分けて報告してきた。

2004年の時点で誤報と思われる種を除いて、土着種は118種、土着か偶産か判定が困難なもの2種、偶産と認められるもの18種の計138種が確認され、比較的珍しい種についてはその概要が明らかになってきたので、この度「兵庫県の蝶」として発刊する運びとなった。

本書発行の目的は、今後、兵庫県の蝶の未知の課題を解明するための基礎資料として採

集記録をまとめたもので、垂直・水平分布、分布の変遷、食餌植物、吸蜜植物、周年経過、越冬の生態など可能な範囲で種ごとに取りまとめた。その他生態面も一部触れているが、生活史の解明までには至っていない。また分布においても不完全で、本書で報告した以外にも多くの記録があるものと思われる。それら分布の実態をはじめ生態面での未解決の問題については今後の研究を期待するところである。

発行に当たっては次の方々には採集記録のご提供を頂き、多方面にわたってご支援ご指導を頂いた。ここに記して御礼を申し上げる次第である。

相坂耕作・芦沢一郎・浅田 卓・青山潤三・足立信一郎・有田 斉・生田 敬・石井為久・石塚棋法・檜 茂樹・五十嵐喜昭・五ヶ君亘弘・井口英雄・一条克也・稲田和久・伊藤哲夫・家永善文・入江照夫・岩崎久和・岩村 巖・上田倫範・上田尚志・上野哲郎・内海功一・宇野正紘・宇山喜士・大前 普・大河原敏男・岡 義人・岡嶋秀紀・岡嶋幹雄・岡本正己・奥谷禎一・奥村達夫・小倉 滋・尾崎 勇・小野克巳・勝屋 潤・鎌田邦彦・柿谷幸広・河井 周・川副昭人・神田正五・川崎悟良・河野綾典・北浦保夫・木下賢司・木下修一・木村三郎・熊谷直順・黒田 収・黒崎史平・桑田正明・久保弘幸・久保寺静雄・小坂文之・小早川 嘉・木暮 翠・斉藤洋一・坂 志郎・佐々木 薫・佐藤邦夫・佐藤誠一郎・酒井正敏・瀧 洪・小路嘉明・柴田 剛・島崎正美・清水浩二・白水 隆・新川 勉・渋谷 誠・墨谷 元・墨谷 健・住田正雄・鈴木秀文・大東康人・高木秀了・竹井 一・竹内 亮・竹内俊行・竹内 隆・竹内 剛・田中 蕃・田中 明・田中昇寿・高柳栄一・高島千洋・高島 昭・高嶋 明・高田忠彦・高橋寿郎・高橋邦明・高橋 匡・高橋久夫・田島 茂・田辺広躬・登日邦明・徳岡正己・谷角素彦・谷川勝彦・立岩幸雄・津村亮次・中西明德・中村康弘・中村久幸・長岡久人・永幡嘉之・長嶺邦雄・難波通孝・若木隆幸・仁平 勲・西 隆広・西島和興・二宗誠治・能川義男・野中 勝・波多野哲哉・浜田 静・浜中義憲・原 聖樹・原 雅幸・花岡 正・春井博文・蜂谷幸雄・服部 保・広利雅美・平木賢一郎・平尾栄治・蛭川憲男・蛭田永規・藤井 恒・藤岡知夫・藤原 進・福田晴男・福本市好・福原 整・福井文嗣・法西定雄・法西 浩・堀田 久・堀 紳二・前平照雄・前波鉄也・牧林 功・増井和夫・松野 宏・松村邦正・松尾隆人・松岡善一・松崎 隆・松井正人・松井英子・松本勝由・三島昭一・三木順一・三木安貞・水元満夫・溝上誠司・三宅誠治・三輪成雄・宮崎由佳・村上秀樹・村上裕通・森下泰治・森口 紀・森地重博・唐土洋一・森中定治・安川謙二・八木 剛・八木 弘・山下剛史・山下順正・山瀬敬太郎・山本 治・山本広一・山本正勝・山本健一・山本俊郎・山口福男・山岡秀夫・矢代 武・矢田敦子・結城八郎・杠 隆史・米村和繁・横山隆司・吉田 豊・淀江賢一郎・若林守男・脇 一郎・(順不同・敬称略)

## この本を使われる方のために

- 1) 採集記録は産地ごとに一例だけ表示している。本来なら産地ごとに初記録を表示する方がよく、また現在の分布状況を知るためには一番新しい記録を表示すべきであるが、それにはこだわらず筆者らの判断でランダムに選んで記録を表示している。
- 2) 採集記録の雌雄の記号は複数固体の場合♂♂、♀♀と表示すべきところ、紙面のスペースの都合で♂、♀としている。
- 3) 採集記録の表示はそれぞれの蝶が県下ではどこに生息しているのかの分布状況がよくわかるように採集地名をトップに表示した。
- 4) 市町村の合併で地名の表示が複雑に変更されている。採集記録の地名の表示は平成18年(2006年)4月の時点での市町村名になっている(p5・図3)。合併によって旧町名が消滅した地名には( )内に旧町名を記載した。  
また合併前の平成11年(1999年)3月31日時点(p3・図1)及び平成17年(2005年)4月1日の時点(p4・図2)の市町名とその境界のわかる地図を参考までにつけている。
- 5) 採集地名は同じ場所でも大字と小字で地名が違うこともあり、その他にも表示が違っている記録で同一場所と判断できる所もあるが、確認ができないものはそのまま発表されている地名で表示している。
- 6) 採集記録の「姫路市御立 2♂3♀ 6-VIII-1998 兵庫蝶太郎<sup>21</sup>」は1998年8月6日に2頭の雄と3頭の雌を姫路市御立で兵庫蝶太郎が採集したということである。兵庫蝶太郎<sup>21</sup>の「21」はこの採集記録はこの本の巻末に表示している参考文献目録の21番の文献を引用しているということである。また、1exは1頭、2exsは2頭ということで雄と雌の区別を確認していないものである。

「姫路市御立 2♂3♀ 6-VIII-1998 兵庫蝶太郎<sup>21</sup>」の見方

採集場所	姫路市御立
採集頭数等	2頭の雄と3頭の雌
採集月日	1998年8月6日
採集者	兵庫蝶太郎

- 7) 参考文献の「兵庫蝶太郎(1996)姫路市の蝶類 ひろおび(3):2-6」は兵庫蝶太郎氏が1996年に「姫路市の蝶類」というタイトルで「ひろおび」という同好会誌3号の2ページから6ページにかけてこの記録を発表しているという意味である。

- 8) 和名、種名、学名は北隆館の猪又敏男著「原色蝶類検索図鑑」に従った。蝶の学名は種小名までにとどめ亜種名は入れていない。必要な場合は他の図鑑を参照していただきたい。また種ごとの国外、国内の分布地の概要を知るために同図鑑を引用しているが、同図鑑に記載されている分布地の一部を省略している場合もある。
- 9) 1ヵ月の上中下旬の区分は1～10日は上旬、11～20日は中旬、21～31日は下旬としている。
- 10) 本来ならば引用文献のすべてに原記載を採用しなければならないところ、省略をして筆者らが報告をしてきた兵庫県産蝶類分布資料(1)～(18)を引用文献として一括で扱っているところがある。したがってそれらの採集記録の検証は兵庫県産蝶類分布資料(1)～(18)の巻末に表示してある参考文献で検索願いたい。文献の検証ができない方で引用文献の必要な方は筆者までご連絡いただきたい。
- 11) 参考文献の19～805まではアイウエオ順に整理しているが、806以降は順不同となっている。
- 12) 分布図は国土地理院の2万5千分の1の地形図の1/4区画分の大きさのメッシュで表示し、採集地点も地図上にプロットしている。しかし、採集地点が分からない記録に関しては表示していない。なお、分布図や表などの市町名の表示は2003年3月以前の市町名になっている。
- 13) 迷蝶や偶然に発見されたと思われる種、採集記録が少なく十分調査ができていない種については巻末の「迷蝶などの記録」のなかでまとめて解説をしている。
- 14) 周年経過の月別採集数表は筆者及び友人の方々から教示いただいた記録、これまでに発行された文献などを集計し、1回の採集数が5頭以上は5と計算している。また、5頭以下は採集された頭数の数字をそのまま1～4頭と計算している。
- 15) 垂直分布について、成虫は採集地点の標高で、幼虫や卵も採集地点の標高でカウントしているが、採集記録場所のすべてを特定することは不可能なので、あくまでも推測の標高になっている。
- 16) 採集記録は特別に保護が必要な種についての産地は表示していないが、筆者らが入手している採集記録はほぼ発表したつもりである。この本は兵庫県の蝶解明の基礎資料として発行をしているので、自然保護に留意して採集活動、観察活動を行って欲しい。
- 17) 発表された採集記録については疑わしい記録も中にはあると思われるが、発表されている報文を信用してその記録を引用している種もある。その点は巻末の参考文献をご確認いただき読者の皆様でご判断をお願いしたい。